

聖書を讀む人のための手引き

・ 神の言葉が命の糧となるために ・



ボグスワフ・ノヴァク著

聖書を読む人のための手引き

・ 神の言葉が命の糧となるために ・

ボグスワフ・ノヴァク 著

はじめに

数えきれないほど多くの人々が経験した通り、聖書には、人間を励まし、慰め、強める力、また、間違った生き方を変え、人生を有意義なものにする力、そして、真の幸福に導く力があります。それは、私たち自身と私たちが生きているこの世界を創造してくださった神の言葉、言ってみれば、人間の創造主である神が私たちに与えてくださった「人生のマニュアル」であり、すべての時代、すべての文化、あらゆる状況に生きていくすべての人のための個人的な導きであるからです。なぜ、万人にとっての個人的な導きと言えるのでしょうか。それは、第2バチカン公会議のときに教会が教えたように、「天におられる父は聖書の中で深い愛情をもって自分の子らと出会い、彼らとことばを交わす」（『啓示憲章』21）からなのです。つまり、聖書は、人間にとって、いづくしみ深い父である神と出会う場、また、対話の場であるからこそ、ヘブライ人への手紙の中で書き記されているように、「神の言葉は生きていて、力が」（ヘブ4・12）あるのです）。

けれども、聖書はそれほど素晴らしくて、あらゆる書物の中で最も重要な本であっても、非常に難しいものでもあります。聖書を読んでみる多くの人々は、神の言葉の力を

体験する代わりに、この難しさゆえに、聖書を読むのをあきらめてしまいがちです。聖書を忍耐強く読み続ける人の中には、聖書によって励まされ生かされるどころか、逆にますます混乱し、戸惑い、場合によっては、躓いて、聖書からだけではなく、信仰や神ご自身から離れてしまう人もいます。預言者イザヤの書を朗読していたエチオピア人の宦官が、「読んでいることがお分かりになりますか」というフィリポの質問に答えて、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」（使8・30・31）と言った通りなのです。

皆さんにとって聖書が、父である神と出会う場、また、神との対話の場、永遠の命の糧となるために、つまり、イエス・キリストとの交わりを深め、愛における成長を促すものとなるために、聖書の特徴、聖書が作成された過程、聖書の解釈、また、神の言葉の黙想について、なるべく分かりやすく説明したいと思います。この説明が多くの人にとって、聖書を読むための手引きとなり、聖書の読書が実り豊かなものとなるようにお祈りします。

なお、聖書からの引用は、『聖書新共同訳』（日本聖書協会）によります。一部、フランチズコ会訳に従って、改変した箇所もあります（「神の言葉」）。

目次

はじめに

1.	神の作品であり、人間の作品である聖書	5
◇	神の作品	5
◇	人間の作品	6
◇	人間の言葉となられた神の言葉	7
◇	救いのための真理	8
2.	神の言葉である聖書	10
◇	神の自己啓示	10
◇	旧約聖書の形成	12
◇	新約聖書の形成	14
◇	使徒たちと司教たちの権威	18
◇	新約聖書の正典化	19
◇	旧約聖書の正典化	22

3. 聖書の解釈

◇ 聖書記者たちの意図を理解する

◇ 聖霊の光のもとに読む

◇ 聖書全体の内容と統一性に特別な注意を払う

◇ 教会の生きた聖伝全体に従って聖書を読む

◇ 信仰の類比を考慮に入れる

4. 聖書の霊的な意味

◇ 寓意的意味

◇ 道徳的意味

◇ 天上の意味

5. レクティオ・デイヴィナ（霊的な読書）

◇ 第1段階…読書

◇ 第2段階…黙想

◇ 第3段階…祈り

◇ 第4段階…観想

25 26 27 29 34 37 41 42 43 44 47 47 49 50 51

1. 神の作品であり、人間の作品である聖書

聖書は、一冊の本に見えますが、実際には73冊の文書を一箇所に集めている「図書館」のような書物です。聖書の中に入っている一番古い文書は、紀元前10世紀に書かれたものです。一番遅い段階で書かれた文書は、西暦1世紀のものです。つまり、聖書全体は、1000年以上の間に、非常に多くの人によって作成された文書、しかも、複数の言語（ヘブライ語、アラム語、ギリシア語）で、様々な所で、様々な政治・経済的状况の中で書かれたものです。また、聖書には、歴史的な物語やたとえ話、預言的や黙示的、また、詩的な表現形式とその他の文学類型があります。

神の作品

それほど多くの相違を持っている文書が、なぜ、一つの聖書になっているのでしょうか。それは、聖書に含まれているすべての文書に一つの重要な共通点があるからです。その共通点とは、共通の作者であること、すなわち、神ご自身作者であるということです。実に、聖書が他のすべての書物と異なる聖なる書であるのは、そのためなのです。勿論、神が聖書の作者であるといっても、神ご自身が直接、それらの文書を書かれたと

いうことではありません。西暦553年にコンスタンチノーブルで開かれた公会議の中で、教会は次のように教えました。「尊き母なる教会は、旧約および新約の全部の書とそのすべての部分を含めて、使徒的信仰に基づき、聖なるもの、正典であるとしています。なぜならそれらの書は、聖霊の靈感によって書かれ、神を作者とし、またそのようなものとして、教会に伝えられているからです」(第2コンスタンチノーブル公会議)。

人間の作品

カトリック教会は、第2バチカン公会議の公文書の中で、聖書が聖霊の靈感によって書かれたことを次のように説明します。「神は聖書を作り上げるにあたってはある人々を選び、彼らの才能と能力を利用してつつ採用したのである。こうして、神が彼らのうちで彼らを通して働くことによって、彼らは真の作者として、神が欲することのすべてを、またそれだけを、書き物によって伝えたのである」(『啓示憲章』11)。つまり、神は真の作者であっても、唯一の作者ではないということです。言われた言葉のみを書き記す秘書のようではなく、神から受けた啓示を、個人の才能と能力に応じて自分の言葉で文書を書いた、人間である聖書記者も真の作者です。したがって、聖書の言葉に

は、神が伝えたいと望まれたことだけではなく、聖書記者の性格や趣味、彼の知識や世界観、さらには、当時の常識や、考え方なども含まれているわけです。

人間の言葉となられた神の言葉

神の作品である聖書が、同時に人間の作品でもあるとは、大きな神秘です。この神秘は、イエス・キリストが真の神であり、真の人間であるという神秘の反映です。この神秘について教会は、次のように教えています。「かつて永遠なる父のみことばが、人間の弱さをまとった肉を受け取って人間と同じようなものになったのと同様に、神のことばは人間の言語で表現されて人間のことばと同じようなものにされた」（『啓示憲章』13）と。イエス・キリストが、罪を除いて他の人と同じ人間になられたように、聖書において神の言葉は、誤りを除いて人間の言葉になったのです。言い換えれば、人間の言葉となった神の言葉は、真理を誤ることなく伝えているということです。それについて、カトリック教会のカテキズムに次のように書かれています。「靈感によって書かれた書は、真理を教えます」（カテキズム107）。また、「神の啓示に関する教義憲章」には、次のように書かれています。「それゆえ、靈感を受けた作者すなわち聖書記者たちが主張していることはすべて、聖霊によって主張されているとしなければなら

い。したがって、聖書は、神がわれわれの救いのために聖なる書として書き留められることを欲した真理を堅固に忠実に誤りなく教えるものと公言しなければならぬ」
（『啓示憲章』11）。

救いのための真理

聖書を正しく理解するためには、少なくとも、聖書に対して不当な期待を持たないために、聖書が誤りなく伝えている真理の性格を知らなければなりません。それは、私たちが、救いのために必要としている真理なのです。言い換えれば、私たちが聖書を読むのは、天文学的や物理学の真理、医学的真理、あるいは、歴史的真理を知るためではありません。なぜなら、そのような真理は、救いの恵みを受けるために必要ではないからです。世界の構成や人間の体の構成を知っていても、人生の目的やその意義、また、正しい生き方を知らない可能性、また、実際に正しく生きていない可能性があるでしょう。逆に、難しい学問を知らなくても、正しく、つまり、創造主である神の意志と人間の本質にしたがって、人間らしく生きることができません。聖書には、このような真理、つまり、創造主である神が人間のために定めた目的に向かって歩むために必要な真理のみを、見出すことができます。

聖書を正しく理解し、聖書の言葉によって生かされるためには、聖書の最も根本的な特徴、つまり、聖書は、神の作品であると同時に、人間の作品でもあるという性格を常に意識しなければなりません。まず、神が聖書の作者であるとは、聖書の内容、つまり聖書が伝えている真理、救いのために必要な、普遍的な真理は、神によって決められたということです。そしてまた、人間が聖書の作者であるとは、この真理を伝える方法、つまり表現の形式、文学的な形などは、人間が決めたということことです。

2. 神の言葉である聖書

聖書は、様々な人が書き記した73冊の文書から成り立っていますが、73冊すべてが聖なる書であること、つまり、神が人間に伝えたいと望まれたことを聖霊の靈感によって誤りなく伝えていくということは、本当なのでしようか。言い換えれば、聖書と呼ばれる本は、本当に神の言葉であるという確信を持つことができるのでしょうか。神ご自身がこのすべての文書の著者のご自分だと認める証明書を発行されたわけではないのですから、誰が、どのように、また、どんな権威を以てそれを決めたのでしょうか。この質問に答える前に、まず、神のことを知る方法、特に神の自己啓示について、次に聖書が形成された過程について、説明したいと思います。

神の自己啓示

人間は、神から与えられた理性によって、様々なことを知り、理解することができます。理性のおかげで、科学が発展し、私たちが生きている世界の構造や人間自身の精神や体の仕組みなどの理解が深まり、技術も向上し、昔は想像もできなかったようなことができるようになりました。同じく理性のおかげで、人間は、何が正しいか、つまり、

どのような行動が人間を生かし、人間の益になるのか、また、どのような行動が人間に害を与えるのかということ、つまり、道徳的な基準をある程度まで知ることができません。また、世界や人間に関する知識に基づいて論理的に考察することによって、存在しているすべてのものの第一原因であり、創造主である存在、すなわち、可視的現実を超える神が存在するという結論を出すこともできません。要するに、理性によって人間は、少なくとも、神が存在しているということ、神は創造主であるということを知ることができません（ロマ 1・20・23）。

けれども、理性のみの力によつては、至底知ることができないことまでも、人間は神について知っています。例えば、神は唯一でありながら、父と子と聖霊という三つのペルソナであること、つまり三位一体の神秘を知っています。このような認識は、神ご自身の啓示によるものです（カテキズム 50）。ヘブライ人への手紙の中に次のように書き記されています。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」（ヘブ 1・1・2）。神は、自分のことを最初から完全に現したださったのではなく、良き教育者のように、人間の心理状況や理解力に合わせて、少しずつご自分を現したださったのです。そして、神の自己啓示の過程の頂点は、神の御ひとり子であ

るイエス・キリストです。次第に完全なものとなる、啓示の過程の発展は、聖書の形成の過程の中で見られます。

旧約聖書の形成

神のわざであるすべての被造物そのものは、神の自己啓示のうち、いわゆる、自然の啓示ですが、神はいろいろな自然の現象や出来事を通して、また、人間のいろいろな体験を通して語られるのです。神は、アブラハムを召し出してから、彼の生涯の中で、また、彼の子孫から生まれたイスラエルという民族の歴史の中で、特に力強く、特にはっきりとした形で人間にご自分を啓示し、この世界に対するご自分の計画を実現してこられました。イスラエル人が体験した神の働き、特にエジプトから解放されたことやシナイ山で神と契約を結んだことは、まず数百年の間に口頭で次の世代に伝えられました。やがて凡そ紀元前10世紀から、口伝された諸伝承が少しずつ文書化されています。紀元前8世紀から6世紀の間、多くの預言者たちが活躍し、過去や現在の出来事の中で見出した神のメッセージ、いろいろな教えや警告や導きを告げました。言葉を自ら書き記す預言者もいましたが、多くの場合は、彼らの弟子や後の人が預言者の生涯や彼らが宣べた言葉を書き記しました。国家を失う経験をしたイスラエル人は、捕囚からパレス

チナに戻った時、民族のアイデンティティを再認識し、それを保ち、次の世代に伝える必要を感じました。そのためユダとイスラエルの王たちの歴史、いろいろな資料に書き記されていた捕囚前の歴史、エルサレムの物語、また、捕囚時代の物語をまとめ、必要に応じて文書化し、いろいろな資料や様々な伝承を合併し、再編集しました。こうして、預言書の作成は、紀元前6世紀までに終わり、モーセ五書は紀元前5世紀に完成しました。その後、ダニエル書やマカバイ記を含む、いくつかの文書が記され、紀元前1世紀に、旧約聖書の最後の書「知恵の書」が書き記されました。要するに、旧約聖書の一番古い文書が書かれてから、最後の文書が書かれるまで、実に1000年以上がかかったわけです。

このように非常に長い過程を経て作成された書が、聖なる書であるとは、聖霊が聖書記者たちを導かれたからなのですが、それだけではありません。聖霊は、元々の出来事やその登場人物の生涯の中でも働かれ、また、この出来事や登場人物の言葉や行いを口頭で伝えた人々にも働かれ、神が伝えてくださった言葉の意味を変えることなく正しく伝える恵みを与えてくださったからです。さらには、口頭で伝えられたそれらの伝承を文書化した人も、いろいろな文書を編集したり、資料を合併したりした人も聖霊の導きに従ってこの作業を行ったからです。要するに、聖書作成のすべての段階で、また、こ

の作成に関わったすべての人々において神が働かれたからこそ、聖書は神の言葉を正しく伝える聖なる書であると確信してよいわけです。

新約聖書の形成

新約聖書に収められているすべての書は、比較的短期間の内に、すなわち、およそ50年の間に書かれましたが、新約聖書も、基本的には旧約聖書と同じような作成過程を経て作成されました。けれども、作成期間が短いため、かえってこの過程の各段階を、より明瞭に見て取ることができません。

まず、神の自己啓示の頂点として、「神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れで」（ヘブ1・3）あるイエス・キリストの生涯、特にパレスチナにおけるイエスの行動と教え、キリストの死と復活がありました。イエスご自身がご自分の教えを書き記したというような記録はありません。イエスは、ご自分の活動のごく早い段階で、ご自分の証人となるために12人の弟子を選んで、彼らに「使徒」、つまり、「遣わされた者」という名を付け、彼らに特別な教育を与えられました。そして復活後にイエスは、この使徒たちにご自分の教えをすべての人々に伝えるように命じ、彼らを全世界に派遣されました（マコ16・15、マタ28・19・20、マタ24・14、使1・8）。カトリック教会のカ

テキズムは次のように教えています。「主キリストは至高の神の全啓示が自らにおいて完了されるため、かつて預言者によって約束された福音を自ら実現し、かつご自分の口をもって宣布しましたが、これを救いに関するあらゆる真理と道徳の源として、すべての人にのべるよう、また彼らに神のたまものを与えるよう使徒たちに命じました」（カテキズム 75）。

福音書が度々示している通り、12人の使徒たちは、イエスの行いを目撃し、イエスの言葉を自分の耳で聞いても、それをよく理解することができませんでした。けれども、そんな彼らも、昇天されたイエスが約束通り遣わしてくださった聖霊を受け、イエスの指示に従って旧約聖書を読むことによって、イエスの行いと言葉の真の意義を見出すことができました。そして、キリストから与えられた使命を果たし、イエスを証しながら、その生涯と教えを忠実に宣べ伝え、その意義を説明するようになりました。使徒たちは、様々な状況に置かれている、いろいろな人々にイエスの福音を宣べ伝えたので、聞く人々の誰もが理解できるように、必要に応じてイエスの教えを聞いた通りではなく、また、イエスの行いを見た通りに伝えたのではなく、それを適宜に編集、適応化しました。

イエスの弟子たちの宣教活動の結果、イエス・キリストを救い主として認めるキリス

ト者の共同体が次々と生まれてきました。聖ルカはキリスト者の共同体の生活を次のように描いています。「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(使2・41-42)。イエスを証しし、イエスの福音を伝えたのは、使徒たちだけではなかったのですが、聖ルカが伝えている通りに、使徒たちは、特別な権威をもって、宣教し、弟子たちから特別に尊敬され、共同体の中心的、指導的な立場になりました。

当時の宣教は、主に口頭で行われました。その頃キリストの行いや教えについての文書も書かれたようですが、後に新約聖書に収められる書簡という形の文書が、西暦50年代に入ってから、聖パウロによって、書かれました。勿論、聖パウロは、それらの書簡を聖書として書くつもりはありませんでした。ただ、自分が創立した共同体において何らかの問題が起こったと聞いても、すぐにそこへ行けないときに、この共同体を教え、戒め、励まし、指示するためにそれらの書簡を書いたのです。聖パウロは、特定の共同体に宛てて書簡を書きましたが、それを読んだ他の共同体のキリスト者が、それを自分の共同体のためにも利用することができるといえるということが分かると、それらの書簡を写し、次々と新しい写本を作ったため、聖パウロと他の指導者が書いた文書は、キリスト

教の世界の中で少しずつ広まってゆきました。

福音書は、書簡の形式をとってはいないとは言え、実際には、書簡と同じような目的のために作成されました。というのは、福音記者たちは、イエス・キリストの行いや教えすべてを、次の世代とか、全世界の人々に伝えようとして福音書を書き記したのではなかったからなのです。初代教会の諸共同体には、新しい、つまりイエスが活動をなさった時にはなかったような、疑問や問題や困難が生じていました。そのために、福音記者たちは、自分たちの共同体のこのような疑問や問題や困難に対処しようとして、イエスの教えやイエスが示してくださった模範に基づいて、必要と思った教え、励ましや導きなどを与えようと思いました。自分の記憶や手元にあった資料の中から必要と思ったものを選び、共同体のキリスト者たちに理解しやすいよう編集し、解釈し、相応しい表現を用いて福音を記しました。要するに、福音記者たちは、各共同体の状況や必要に応じて、使徒がしたようにイエスの教えを適応化したのです。福音記者たちは、それぞれ異なる現状にあつて、異なる問題や困難に直面していた共同体のためにその福音書を書きましたから、そして彼らは一人ひとり、性格とか生まれ育った環境や受けた教育も異なり、イエスの教えや神学の課題に関する好みも異なっていましたから、同じイエスの生涯と教えを基にしても、結果的には異なる福音書を作成するに至ったわけです。

使徒たちと司教たちの権威

聖パウロの書簡が示しているように、初代教会においてすでに間違った教えを宣べる人たちがいました。教えが正しいかどうかということを決めるために決定的な権威をもっていたのは、使徒たちでした。使徒たちは、この権威を教会から与えられたのではなく、イエスご自身から与えられたのです。ご自分の教えをすべての人々に伝えるように使徒たちを遣わしたイエスは、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（ヨハ 20・21）と言われました。イエスが神の名によって語る権威を父である神から与えられたように、ご自分の名によって語る権威をイエスは使徒たちに与えられたということです。聖パウロは、1世紀のキリスト者の意識を表して、使徒たちについて、次のように語ります。彼らは、「新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を」（二コリ 3・6）神から与えられた者、「キリストの使者の務めを果たしている」（二コリ 5・20）者、「キリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者」（一コリ 4・1）である、と。このように、初代教会のキリスト者たちは、イエス・キリストが使徒たちに与えてくださった権威を認め、使徒たちがイエス・キリストの名によって語る、イエスの代理人であることを認めています。それゆえにこそ、ある教えが正しいものであるかどうかということ判断する決定的な権威を

使徒たちに委ねたのです。

使徒たちは、この権威、つまり、キリストの代理として、キリストの名によって語る権威を、彼らが任命した自分たちの後継者に伝えました。このことは、キリスト者によつて、最初から認められていました。聖パウロも（例えば、一テモ3・1・7、テト1・7・9）、教父たちも（例えば、ローマの聖クレメンス、アンチオキヤの聖イグナチオ）使徒たちの後継者、すなわち司教たちの権威を認めています。

使徒たちは、キリストご自身から与えられた権威、また、彼らが司教たちに伝えたこの同じ権威は、教えの正しさを決定するものであったと同時に、聖霊の靈感によつて書かれた文書、つまり、どのような書が神の言葉で、聖書に属するものであるかということとを識別する権威でもあったのです。

新約聖書の正典化

初代教会のキリスト者は、ユダヤ人と同じように、「正典的な意識」、すなわち、彼らが持っていた特定の文書が、彼らのキリスト者としての生活の規範となつていくという確信を持っていました。この確信を、聖パウロの言葉が描いています。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をする

うえに有益です」(二テモ3・16)。そのために、キリスト教の各共同体は、ユダヤ教会から受け継いだ聖書と同じように重要であり、有益になると思った文書を大切に保管し、他の共同体が持っていた文書を写したりしたのです。

2世紀の前半に、多くの場合司教でもあった教父たちは、自分たちの共同体のために、正典と認めた文書のリストを作り始めます。教父たちは、四つの福音書とパウロの書簡を、ユダヤ人の聖書と同じ権威のある書として認めました。西暦202年に亡くなったリオンの司教聖イレネオは、ユダヤ人の聖書を「旧約」、そして、正典として認められたキリスト者の文書を「新約」と呼び始めました。

しかし、全ての共同体が、同じ文書を靈感に基づいて書かれたものとして等しく認めただけではなく、各共同体において出来上がった正典のリストは異なっていて、すべては、暫定的でした。その後も、除外した文書が次々と出回り、マルキオンのような異端者たちは、自分たちの正典を作り始めました。そのため使徒的教会は、公式に正典を確定する必要がありました。新約聖書の二十七の正典は、393年のヒッポンの教会会議と397年のカルタゴ教会会議において、教会を代表して集まった司教たちによって承認されました。その後、多くの教皇と公会議によって再確認されます。

このように凡そ300年もかかった新約聖書の正典化の過程において、第一の基準、つまり、聖書に属する文書として承認する一番大事な条件は、文書の使徒性です。文書の使徒性とは、著者が使徒自身であるということに限らず、何らかの仕方で使徒の伝承につながっているということです。例えば、使徒の弟子や協力者が書いたものや、使徒や弟子が残した資料の収集、その合併や編集の結果として作成されたものです。第二の基準は、文書の普遍性、つまり、文書がある特定地方の共同体だけではなく、全教会で通用するものであるということです。第三の基準は、正統性、つまり、文書全体が、使徒の教えと一致していること、さらに第四の基準として、文書が朗読や教えるために用いられるのみならず、典礼においても用いられるということでした。

新約聖書の正典化の過程は、教会全体による、特に使徒たちからキリストの名によって教える権威を受けついだ司教たちによる、識別の過程でもありました。司教たちにその権限がなければ、彼らが行った正典化には根拠がないこととなりますし、どの書が聖霊の靈感に基づいて書かれたかが誰にも分からなかったことになるのです。したがって、聖書を神の言葉として読むために、使徒たちの後継者の権威を認める必要があります。逆に言えば、使徒たちの後継者である司教たちの権威を認めていない人には、カトリック教会の識別を信頼する根拠も、新約聖書を神の言葉として認める根拠もないため

に、聖書が本当に神の言葉であるという確信を持つことができないことになるのです。

旧約聖書の正典化

ユダヤ教は、伝統的に聖なる書物を三つのグループに分けていました。第1のグループは、モーセ五書です。第2のグループは、預言書です。そして、第3のグループは、諸書です。1世紀のユダヤ教の世界において、第1と第2のグループに属する文書は、はっきりと決まっています、これらの文書は、公に聖書として認められていました。しかし、第3のグループに属する文書については、まだはっきり決まっておらず、いくつかの文書の権威について疑問を持つユダヤ人のラビもいました。けれども、ユダヤ教にとっては、エルサレムの神殿が中心となっていた時に、聖書の正典が正式に決まっていなかったことは、問題にされなかったようです。けれども、神殿が破壊された西暦70年からユダヤ教は、自分たちのアイデンティティを確定し、それを保つために新しい基礎を求め始めたのです。当然のこととして、聖書がユダヤ教の基礎になりました。そこで、どの文書が聖書であるかということ、はっきりと決める必要性が生じてきたわけです。ラビたちの会議の結果、2世紀末から3世紀初めごろに、ヘブライ語やアラム語で書かれた三十九の文書が聖書と認められました。しかし、ギリシア語で記された七つの

文書（トビト記、ユデイト記、知恵の書、シラ書、バルク書、マカバイ記一、マカバイ記二）は、聖書として認められず、正典に入りませんでした。そして、三十九の文書が公に認められるようになっても、その中のいくつかの文書については、まだ5世紀まで議論され続けました。

したがってキリスト教が生まれた1世紀の時点では、ユダヤ教の正典がまだはっきりと決められていませんでした。2世紀の終わりにユダヤ教のラビたちによって正典から外された7の書は、少なくとも七十人訳聖書（旧約聖書のギリシア語の翻訳）を用いたユダヤ人によって聖書として認められていました。また、この七つの文書の中の三つが、クムランで発見された写本の中にありましたので、クムランの共同体もこの書を聖書として認めていたという結論を出す学者もいます。

この七つの文書は、1世紀のユダヤ教の中で、どのように評価されていたかは分からなくても、キリスト教が最初からこれらの文書を旧約聖書の他の文書と同じように、權威のある書として用いていたということは確かです。初代教会は、ユダヤ人たちが2世紀の終わりに除外した七つの文書を含む、四十六の文書を聖書として、382年のローマの教会会議、393年のヒッポン教会会議、397年のカルタゴ教会会議において、正式に承認しました。

キリスト教の立場から考えれば、使徒の後継者である司教たちに、新約聖書の正典を

承認する権威があつたように、旧約聖書の正典を承認する権威もあつたと言えます。したがって、ユダヤ教のラビたちの決定に従う必要は、キリスト教側にはなかつたので

3. 聖書の解釈

聖書は、私たちの救いのために必要な真理を誤ることなく伝えていると認めたとしても、この真理を正しく真理として、どのように見分けることができるか、また別の言い方をすれば、聖書を読んで自分に見えてきたことは、神が私に伝えたかしたことであるかどうかということ、どのようにして正確に知ることができるのでしょうか。というのは、聖書において神の言葉は、人間の言葉で表現されていますので、他の人間の言葉と同じように、この言葉からいろいろな意味を読み取ることができます、つまり、この言葉のいろいろな解釈が可能である、しかもその中には間違った解釈すら可能であるということ、このような可能性は、聖書を読むに当たって、現実的で、非常に大きな問題となるものなのです。

第2バチカン公会議の公文書「神の啓示に関する教義憲章」は、この問題について、次のように述べています。「神は聖書の中で人間を通して人間の方式で語ったので、聖書の解釈者は、神が何をわれわれに伝えようと欲したのかを見極めるためには、聖書記者たちが実際に何を表現しようと意図したのか、神が彼らのことばによって何を明らかにしようと望んだのかを、注意深く研究しなければならない」（『啓示憲章』12）。要

するに、神が私たちに何を語っておられるかということを読み取るためには、まず、聖書記者たちが何を伝えようとしたのか、また、当時の読者はこの文書をどのように読んでいたのかということ、正しく理解する必要があるということです。

聖書記者たちの意図を理解する

「聖書記者たちの意図を発見するために、当時の状況と文化、当時使われていた『文学類型』、当時普通であった感じ方、話し方、物語り方を考慮する必要があります。『実際、種々の方式での歴史的な、あるいは預言的な、あるいは詩的な書において、またその他の表現形式において、真理は違った方法で語られ、かつ表現されています』（カテキズム110）。

考えてみれば、そもその本文が書かれた言葉さえ知らないがゆえに、翻訳でしか読めない聖書の一般読者には、読んでいる文書の表現形式や文書が関連している歴史的な状況がある程度まで意識することができたとしても、この文書の原語でもともとの意味を読み取ることは、全く不可能です。したがって、「聖書記者たちの意図を発見すること」は、聖書を専門的に研究している学者たちの仕事となるわけです。ですから、私たちは、聖書をより正しく理解するために、学者たちが編集した聖書辞典や注解書な

どを用いて、聖書記者が用いた言葉や当時の状況について勉強する必要があります。また、自分にも分かる言語のいろいろな翻訳を読み、それを比較することによって、言葉や表現の元々の意味や当時の使い方の理解を深めることも大切です。

聖霊の光のもとに読む

聖書を神の言葉として読む人にとって、人間が書いた文書を理解することは、神が語ってくださる言葉を理解するための手段です。神の言葉を見出すためには、人間の作者の言葉の真の意味に基づいて、聖書の作成に関わったすべての人を導いてくださった聖霊に照らされて聖書を読み、解釈しなければなりません。自分の理性だけを頼りにし、聖霊の導きを無視して、また、聖霊の存在や聖霊の働きさえも信じないで聖書を読むなら、他の本を読むことと全く同じことになります。せっかく聖書を研究して聖書記者の言葉の意味が分かったにもかかわらず、依然として神の言葉を理解することができないということになるわけです。聖霊の光のもとに聖書を読むためには、まず信仰と聖霊の導きに従いたいという望みが是非必要です。聖書を読む前に、聖霊の導きを願い求めることは、この信仰を新たにし、心を開くために大切なことです。聖書を読む前に、例えば、次のような祈りを唱えることができます。

「聖霊、来てください。」

いつも、聖書の言葉を通して、私に語ってくださること、

神の愛を示し、正しいことを教え、励まし、

導いてくださることを感謝いたします。

神の語られる言葉を理解することができるよう、

私の心を開き、理性、感覚、記憶を照らしてください。

理解したことを実行し、愛に成長することが出来ますように、

私の心をあなたに対する信頼と愛で満たし、力付けてください。

私たちの主、イエス・キリストによって。アーメン。」

けれども、聖霊の導きに従って聖書を読むつもりであったとしても、また、自分が聖霊の導きに従って聖書の言葉を解釈しているという強い確信を持っていても、実際には、自分の考えや望みに従い、場合によってはいろいろな先入観に支配されて、全く間違った判断を下すことも珍しいことではありません。このような危険性を避けて、実際に聖霊の導きに従って聖書を読み、それを解釈するために、第2バチカン公会議の公文

書において教会は三つの規則を与えています（カテキズム112, 114、『啓示憲章』12）。

第1の規則は、聖書全体の内容と統一性（一体性）に特別な注意を払うこと、

第2の規則は、教会の生きた聖伝全体に従って聖書を読むこと、

第3の規則は、信仰の類比を考慮に入れることです。

聖書全体の内容と統一性に特別な注意を払う

聖書に含まれている文書は、1000年以上の間に渡って、全く異なる状況において生きていた非常に多くの人々によって作成されていますが、同時に、神の自己啓示の発展と神の救いの計画の実現の過程を表すものでもあり、最初からはっきりとした目的を指しておられた聖霊の導きに従って作成されたものです。つまり、神が聖書のすべての書の真の作者ですから、すべての書が、互いに矛盾していない神の言葉を伝えているのです。確かに、聖書記者たちは、互いに矛盾していることを伝えることもありましたが、各々の文書によって伝えられている神の言葉を見出して、それに注目するならば、それら矛盾しているかのように見えた記述は、互いに矛盾していないだけではなく、補

い合いながら、一つの真理を伝えているということが分かります。

例えば、創世記の第1章によれば、神に象って、神の似姿として創造された人間は、最初から男と女に創造されました。けれども、創世記の第2章によれば、神は、まず男を土から創造した後、女を男のあばら骨から創造しました。二つの異なる伝承を伝えているこの物語を表面的なレベルだけで見れば、互いに矛盾していて、一方が事実なら、他方は嘘になります。けれども、この物語が伝えている普遍的な真理を見出せば、二つとも、同じ人間の別の側面を表し、より完全に人間についての真理を教えているということが明らかにあります。要するに、人間には、神ご自身に象られた霊的な次元、例えば、不滅の霊魂や愛する能力などがあると同時に、この世の一部としての肉体的な次元もあるという真理、及び、性別などの違いがあつても、すべての人は同じ本質を有しているがゆえに平等であり、互いに愛の対象になり得るという真理です。

旧約聖書の神は、正義の神で、厳しくて、時に残酷な方であるのに対して、新約聖書の神は、優しく、いくしみ深い方であるという印象を受ける人が非常に多くいるようです。けれども、このような印象は、聖書の表面的な読み方の結果に過ぎないものなのです。旧約聖書も、新約聖書も、同じ神の言葉ですし、同じ神を現しています。聖書全体は、イエス・キリストを頂点とする神の自己啓示の発展と、イエス・キリストの受

難と復活を中心とする、神の救いの計画の実現の過程を伝えていきます。そこには確かに、啓示や救いの計画の様々な段階と、人間の様々な受け止め方や理解の仕方が見出せます。したがって、二種類の言葉、まずは、神の真の啓示と真の働き、すなわち神の言葉と、次に、人間の、時に不十分な、時に間違った反応や表現、すなわち人間の言葉とを区別して、旧約聖書を正しく理解するためには、イエス・キリストの行いと言葉、また、イエスの死と復活を基準にして、旧約聖書を読まなければならないのです。

しかし逆もまた言えます。つまり、新約聖書、もつと具体的に言えば、イエス・キリストの行いと言葉を正しく理解するためには、メシアが遣わされるための準備期間でもあり、イエスの生涯の環境、及び活動の舞台であった旧約聖書を読む必要があるということです。実に、新約聖書と旧約聖書は、互いに矛盾してはいないだけでなく、互いに照らし合っているのです。この事実を聖アウグスチヌスが、次のように美しく表現しています。「新約が旧約のうちに秘められ、旧約が新約のうちに明らかとなる」（「七書についての諸問題」2・73、カテキズム129）のです。

神の計画の一貫性の結果である、聖書全体の一貫性を認めることは、部分に注目したあまりに間違った判断を下したりしないためにも、非常に重要なことです。例えば、イエスが語った「放蕩息子」のたとえ話（ルカ15・11・32）から、神は、回心した罪人を

必ず受け入れてくださるといふ正しい決断を下す一方で、神は、たとえ話の父親と同じように、罪人の回心を待っておられても、この人の回心のためには何もなさらないといふ間違つた結論を出すことも可能です。けれども聖ルカが、「放蕩息子」のたとえ話の前に載せた「迷い出た一匹の羊」のたとえ話（ルカ15・4・6）の中心的なメッセージを見れば、神は、罪人が回心するように、たとえ話の羊飼いと同じように働いておられることが分かります。つまり、聖書全体の一貫性に思いを致すならば、神がたとえ話の父親と同じように、罪人の回心のために何もなさらないといふ結論は、間違つていふことも分かるわけです。実に神は、聖書全体が表している通り、罪人をご自分のもとに導き、愛の交わりに受け入れるために、常に働いておられます。そのためにこそ、御ひとり子を罪人のところに遣わしてくださったということも、また、イエス・キリストにおいて神ご自身が私たちのもとに来てくださったということも、言えるのです。

要するに、聖書全体の内容とその統一性に特別な注意を払うといふことは、聖書全体が、一人の作者である神ご自身によって作成された一つの書物として認め、聖書の別々の箇所から互いに矛盾しているような結論が出た場合には、その内の少なくとも一つの結論が間違つている（両方とも、間違つていふという可能性もある）といふことを認めることなのです。それは、また、いろいろな所から読み取つた様々なメッセージの関連

を見出し、それを一つの大きなメッセージに繋げること、あるいは、一つの個所から読み取った神の言葉によつて、他の個所を照らし、その理解を深めることでもあります。

確かに、いくら考えても、いくら祈っても、他の個所で見出した神のメッセージと調和するメッセージを、どうしても見出すことのできない個所があります。けれども、神の言葉を信頼し、聖書を忍耐強く読み続け、読んだことを正しく理解するためにできる限りのことをし続けるなら、教会が教えている通りに、聖書全体は、一貫した、調和のとれたメッセージを伝えているということ、つまり、表面的に読むときには全く関係がないと感じられたり、矛盾しているのではないかと思われような書や個所は、実際には深く繋がっているということが少しづつはつきりと見えてきます。そのとき、本当に同じ霊がすべての聖書記者を導いてくださったのだということ、神ご自身が聖書の真の著者だという事実が実感できるのです。

おそらく、この実感は、聖書を忍耐強く読み続けることの一つの大きな実り、一つの大きな恵みです。この恵みを受けた人は、大きな安心と確信をもつて聖書を読みながら、神との対話を続けることができると同時に、人類の歴史においても、自分自身の人生においても、神の働き、神の導きを見出すことができるようになります。結果的にこの人は、この世のいかなるものも与えることのできない安心と喜び、また、何よりも強

い希望に満たされて生きるようになるのです。

教会の生きた聖伝全体に従って聖書を読む

ペトロの第二の手紙の中に次のように書かれています。「何よりもまず心得てほしいのは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないということです。なぜなら、預言は、決して人間の意志に基づいて語られたのではなく、人々が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです」（二ペト 1・20・21）。「自分勝手に解釈する」とは、一人で聖書を読んだり、個人的に解釈することではありません。それは、イエス・キリストの証人、イエスご自身からイエスの名によつて教える権威を授けられた使徒たちの教えを無視すること、また、彼らの教えに逆らうような解釈をすることです。

使徒性（使徒的性格）は、正典識別のための、第一の基準でしたので、新約聖書のすべての文書は使徒たちの教えを正しく伝えていと確信することができます。一方、使徒性が新約聖書の正典化の過程において第一の基準であったというのは、聖書が形成される前にすでに、教会は、聖書と異なる形において使徒たちの教えを持っていたということです。教会は、文書以外の形で使徒たちから受け継がれたものも、イエスの福音を忠実に伝えるものであると認め、それを聖なる伝承、「聖伝」と呼びます。

使徒たちは、3年以上にわたりイエス・キリストに従って生活し、イエスが語った言葉を聞くことによってではなく、イエスの行いやいろいろな人々に対するイエスの態度を見ることによって、また、イエスと共に祈り、食事をし、旅をすることによって、また、他の様々な体験をすることによって、イエスから、言葉で表現できる以上のことを学びました。さらに、復活された後にも、イエスと接することによって、また、イエスが遣わしてくださった聖霊を受けることによって、使徒たちの考え方、生き方、すなわち彼ら自身が変わったのです。したがって、彼らは、イエスから与えられた使命を果たし、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるために、説教したり、聖書に基づいて他のユダヤ人と論じ合ったりしたわけではありませんでした。彼らは、自分たちの生き方、多くの奇跡を含む宣教活動、回心した人々に洗礼を授けること、キリスト者の共同体とその組織を作ること、また、他のキリスト者と共に祈り、貧しい人々を助け、共同体の生活によって、言葉のみで伝えることのできないことを伝えたのです。

聖パウロは、キリスト者たちに（後に新約聖書の一部となった）手紙だけではなく、口で伝えたことも、自分の生き方によって伝えたことも固く守るように呼び掛けています（二テサ2・15、一コリ11・1）。その通りに、教会は、2000年前から、聖パウロと他の使徒たちから受け継いできたことを、その教えと生活において、また典礼など

において保ち、それを次の世代に伝え、これからも、世の終わりまで、伝え続けるのです（カテキズム 78、『啓示憲章』8）。

教会は、聖伝と聖書の繋がり、また、両者の重要性を次のように説明しています。「聖伝と聖書とは互いに密に結びつき、通じ合っている。というのは、神という同じ源から流れ出ている両者は、ある程度は一体であって、同一の目的を目指しているからである。実に聖書は、神の霊の息吹によって書き記されたものであるかぎり、神の語りかけであり、他方、聖伝は、主キリストと聖霊から使徒たちに託された神のことばをその後継者たちに余すところなく伝達するものである。こうして彼らは、真理の霊に照らされながら、神のことばを告げ知らせつつ忠実に保ち説明し広めるのである。したがって、教会が、啓示されたすべてのことについて確信を得るのは聖書だけからではない。それゆえ、両者は等しく敬虔な心と尊敬の念をもって受容され尊重されなければならない」（『啓示憲章』9）。

私たちは、教会が保ってきた聖伝に従って聖書を読み、それを解釈するならば、使徒たちが伝えた教えを忠実に解釈しているという確信、すなわち聖書を正しく理解しているという確信を持つことができます。使徒たちから受けついで聖伝は、聖書と同じよう

に変わることがありませんが、教会の理解は時代と共に深まってきました。ですから、

聖伝に従って聖書を読むとは、昔から伝わってきたことをそのまま繰り返すのではなく、聖伝に逆らわないように注意しながら、それを自分の現状に適用したり、現代の人に分かりやすい言葉で表現したり、その理解をさらに深めたりすることなのです。

信仰の類比を考慮に入れる

聖伝に従って聖書を読むつもりであっても、聖伝の間違った解釈をすれば、聖伝に従うことにはなりません。解釈を誤らないために、聖書を正しく読むための第3の規則は、信仰の類比を考慮に入れることです。この規則の意味を理解するためには、まず、使徒たちの後継者の役割と教会の教導職のことを理解する必要があります。

教会は、聖書と聖伝という形において、神の言葉（福音）という信仰の聖なる遺産を直接的に、または、間接的に、使徒たちから受けつぎました。この信仰の遺産を保つこと、それを説明すること、また、それを広めることは、使徒たちの後継者である司教たちの務めです。このような務めを与えられた司教たちは、聖ペトロの後継者であるローマの司教、すなわち教皇様と一致している教会の教導職です。実は、教会の教導職にだけ、使徒たちを通して教会に託された神の言葉であるイエスの福音を、決定的に解釈す

る權威があるのです。

教会の教導職について、第2バチカン公会議は、次のように教えています。「その權威は、イエス・キリストの名において行使される。もちろん、この教導職は神のことばの上にあるのではなく、これに奉仕するものであって、伝承されたものだけを教えるのである。すなわち、神の命令と聖霊の助けによって神のことばを敬虔に聞き、尊く保ち、忠実に説明する。しかも、神により啓示された信じべきこととして提示するすべてのことを、この一つの信仰の遺産からくみ取るのである」（『啓示憲章』10）。

ですから、聖伝に従って聖書を読み、使徒たちが伝えた教えに忠実に聖書を解釈しないなら、自分の考えよりも、教導職による教会の正式な教えを優先するべきなのです。つまり、自分の判断が教会の教えに矛盾するならば、間違っているのは、教会ではなく、自分の方であるということを率直に認め、間違った判断を手放すことです。こうして、教会の教えは、聖書を読む人を間違った解釈から守ります。

一つの例として「罰」のことを考えてみましょう。新旧約聖書の多くのところで、「神が罰を与える」と述べられています。教会の教えを知らずにそのような箇所を読むなら、神はいつくしみ深い父であるのではなく、この世の権力者のように自分の権利を守るために、それに逆らった人に復讐するような方、あるいは、無慈悲な審判者のよう

に、人の内面的な状態や動機を無視して、この人の善を全く考えずに、法律に定めた刑罰を下すような方であるというような間違った判断を下すことがあり得ます。けれども、罰と言われているのは、「外部から神によって行われる一種の復讐ではなく、罪の本性そのものから生じるものと考えるべきです」（カテキズム1472）という教会の教えを知ったならば、神は、罪を犯す人が罪の結果を味わうことを許しても、罪人を罰するために、彼をいろいろな困難に合わせたり、彼にいろいろな苦しみを与えたりするような方ではないということが分かります。罰についての教会の教えを土台にして聖書を読むなら、間違った結論を出すのを避けることができるだけではなく、今まで決してありえないと思った個所にも、イエス・キリストが現してくださったいくしき深い父の姿を見出すことができるのです。このように、教会の教えは、聖書を読む人を間違った解釈から守るだけではなく、聖書の言葉の理解を促し、それを深めるのです。

考えてみれば、初代教会のキリスト者は、新約聖書を読む前に、使徒の教えを熱心に聞き、使徒たちが伝えた伝承を受けて、それに従って生きてきました（使2・41・42）。使徒たちの教えは、新約聖書に属する書を識別する基準になっていただけではありません。使徒たちが、イエスがなさったことや教えてくださったことに基づいて、旧約聖書を読んで始めて、言葉の真の意味を見出したように、キリスト者は、使徒たちから受

けついでことに基づいて新約聖書と旧約聖書を読んで、その言葉を理解していたに違いありません。使徒たちの教えを伝え、それを正しく解釈している教会の教えに基づいて聖書を読む私たちも、間違った解釈を避けることができるばかりか、その教えを知らずに読んでいたときには全然分からなかった言葉の意味が分かり、また、部分的にしか理解していなかった箇所をもっと深く理解することができるようになります。

4. 聖書の靈的な意味

どんな書物を読むときにも、それを読む目的によって、読み方自体も、その結果も変わるものです。聖書も同じです。聖書を神の言葉として読みたいならば、聖書が作成された目的、つまり私たちが救いのために必要としている真理を伝えるために書かれた書物であるということを意識し、その真理を見極めるために読まなければなりません。前に述べたように、人間の作品でもある聖書を通して神が伝えてくださる真理を見出すためには、まず、人間の作者の意図を理解する必要があります。聖書記者が書き記した文書を通して表現しようとした意味は、伝統的に「文字どおりの意味」、または、「字義的意味」と呼ばれています。また、神がこの文書を通して伝えてくださる真理は、「靈的意味」、または、「靈性的意味」と呼ばれています。文字どおりの意味と靈的意味は、特に新約聖書において、同じであることがよくあります。それは、聖書記者が救いのための真理を直接的に表現しているからです。けれども、特に旧約聖書において、聖書記者が、自分で書き記した文書を通して、どのような真理を伝えているかということがはっきりと分からなかったことは、珍しくありませんでした。この真理は、イエスの死と復活、また、イエスが啓示してくださった他の真理によって、はじめて明らかにさ

れたのです。

カトリック教会のカテキズム（115、117）において、霊的意味は、寓意的意味、道徳的意味、天上の意味に細分されています。したがって、正確に言えば、文字通りと霊的という二つの意味をもっている聖書には、四つの意味、すなわち、文字通りの意味、寓意的意味、道徳的意味と天上の意味があるということになるわけです。「これら四つの意味は根本的には一致し、教会の中にあつて聖書を読むとき、読書を豊かにするものです」（カテキズム115）。次に四つの意味を、ひとつひとつ見て行きましょう。

寓意的意味

聖書の本文は、直接的にいろいろな人物や出来事、また、場所やものについて語つても、多くの場合、間接的にイエス・キリスト、また、イエス・キリストの救いの働きについて語っています。ですから、聖書を読むときに、今読んでいる個所をイエス・キリストと関連づけて考察することは、非常に有意義なことです。

例えば、イスラエルの民の過ぎ越し、つまり、エジプトから解放され、紅海を通過したことは、キリストの過ぎ越し、つまり、イエスの死者の中からの復活、また罪とその

結果である死に対する勝利を意味します。兄弟によってエジプトに売られたものの、結果的に自分の家族を助けたヨセフ、また、イスラエル人をエジプトから導き出したモーセは、救い主の前表、または、表象です。

道徳的意味

聖書において、神が与えてくださった戒め、また、イエス・キリストの教えや聖パウロのいろいろな指示は、私たちに真の善と真の悪を示し、正しい価値観と同時に、正しい生き方をはっきりとした仕方で教えてくれます。けれども、聖パウロが語る通りに、「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです」（一コリ10・11）。ですから、表面的には、正しい生き方についての教えと関係のない出来事や物語やいろいろな人々の働きや経験なども、私たちを正しい行動に導く可能性がありますので、聖書のあらゆる書、あらゆる箇所を読むときに、自分がより正しく生きるための導きやヒントを求めることが、大切です。

聖書から正しい生き方を学ぶことは大事ですが、決定的な変化、つまり、私たちの生き方と共に私たちが自身を実際に変えるのは、学んだことを実行することです。学んだこ

とを実行することによって、私たちは、「古い人」を脱ぎすてる、つまり、正しくない生き方を少しづつ諦めると同時に、「新しい人」を身に着ける、つまり、正しことを行うように努めます。それによって、正しい生き方が少しづつ自分の自然な生き方になっていき、聖霊の導きに対する信頼が深まり、聖霊の働きに対して心が次第に広く開かれてゆき、聖霊の導きに段々と敏感になります。その結果、聖書を読むときにも、日常的な体験においても、聖霊が私たちに語る言葉を一層正しく、一層はつきりと理解することができるようになります。

天上的意味

神は、人間にご自分を求めさせ、人間をご自分のもとへと引き寄せるために、人間の創造の目的である、神の国や永遠の命とも呼ばれる天国のすばらしさを、いろいろな出来事や言葉を通して現してください。ですから、聖書に記されているいろいろなことがらや出来事から、永遠の意味を考察することもできます。

ダキアのアウグスチヌスは、以上の四つの意味を簡単に次のように表現しています。すなわち、「字義は出来事を、寓意的意味は何を信じるべきかを、道徳的意味は何を行

うべきかを、天上の意味はどこに向かうべきかを教える」と。

*

1993年4月15日に教皇庁聖書委員会が発行した「教会における聖書の解釈」は、霊的な意味を次のように定義し、聖書を読む人がそれを見極めるために重要なことを次のように記しています。

「一般的原則によれば、霊的な意味とは、キリスト教信仰にしたがって理解されるもので、聖書本文を聖霊の影響のもとで、キリストの過越秘義とそこから来る新しい命の文脈の中で読むとき、その本文によって表現されている意味であると定義することができる」(1413)。

「霊的な意味を、想像や知的推論によって導かれる主観的解釈と混同してはならない。それは、聖書本文がその本文にとつて外のものではない実際の事実、つまり過越の出来事とその汲めども尽きぬ生産力と関係をもつことにより湧き出てくるものである。この過越の出来事こそ、全人類のためにイスラエルの歴史の中でなされた神の介入の頂点である」(1416)。

「共同体の中にしても個人的にしても、霊的な解釈が真正銘の霊的な意味を見出す

のは、ただこの展望にとどまっている場合だけである。そのとき、聖書本文と過越秘義と聖霊における命の現状という3つの位相の現実が関係しあう」（1417）。

要するに、洗礼を受け、神の命にあずかって、キリストの弟子、また、神の子どもとして生きている人は、聖書の本文を忠実に読むと同時に、自分が生きている現状を意識しながら、聖霊の導きに従って、イエス・キリストがご自分の死と復活によって成し遂げた救いのわざを土台にして、聖書を読むならば、どんな時代、どんな文化であれ、自分が生きている具体的な状況において最も必要な真理、最適な導きを見出すことができるのです。

教会の2000年の歴史において、聖書をこのように読むために、様々な具体的な読み方が提案されてきましたが、その代表的なものとして、多くの聖書の読み方や神の言葉の黙想の仕方の基礎にもなっている、レクティオ・デイヴィナ（霊的な読書）を次に紹介したいと思います。

5. レクティオ・デイヴィナ（靈的な読書）

靈的な読書とか、神聖な読書という意味のレクティオ・デイヴィナ（ラテン語：Lectio Divina）は、聖書の読書に基づく祈り、また、神の言葉の黙想の方法として、もうすでに教父の時代、つまり、4、5世紀から活用されてきました。12世紀のカルトジオ会の修道士グイゴは、レクティオ・デイヴィナの基本的な四つの部分、ないしは段階を記述しています。その段階とは、第1段階Lectio（読書）、第2段階meditatio（黙想）、第3段階oratio（祈り）、第4段階contemplatio（観想）です。

第1段階…読書

この段階の目的は、黙想の対象となっている聖書の個所を理解することです。そのために、まず、この個所をゆっくり読みます。この文書の表現形式（出来事の叙述や歴史的な物語とか、説教やたとえ話とか、詩など）を意識して、読んだ本文に対して可能な質問をし、その中で答えを探します。例えば、何が（起こっているか、取り扱われているか、課題となっているか）、誰が（登場するか、対話するか、話題となっているか）、何を（話すか、するか）、どこで、また、いつ（この出会いや出来事が起こって

いるか)、どのように(反応するか)、どのような感情が表現されているか、何故かなどの質問をして、回答を試みるのです。

特に、今まで何回も読んだために良く知っている聖書の箇所を読むときに、細かいことに関する、「当たり前」と思われるような質問をすることによって、今まで気付かなかったことを発見することも、本文をより深く理解することもできるのです。

また、自分の質問に対する答えを、本文の中に見出せないことがあります。それは、この個所が伝えているメッセージを理解するためには、知らなくてもいいものであるかもしれません。それとも、この書の最初の読者にとって、常識的なことであって、よく知られているために書く必要もないようなことであつたかもしれません。ですから、多くの場合、読んでいる文書を理解するために、できるだけこの書の最初の読者の立場になって、この読者がこの文書をどのように理解したかということを考える必要があります。そのためには、その文書が、いつ、どのような状況におかれた人のために書き記されたかということを知ることが必要です。例えば、その文書がユダヤ人を対象として書かれたものであるなら、イスラエルの歴史や旧約聖書の知識などを土台にして、彼らの世界観、表現方法なども、考える必要があるのです。多くの場合、聖書辞典や注解書などを読んで、勉強する必要があります。

第2段階…黙想

黙想の目的は、読んでいる個所の中に、神の言葉を見出すこと、つまり、この聖書の個所によつて神が自分に伝えようとしておられることや与えてくださるメッセージを、読み取ることです。それが、自分にとつて、どのような意味を持つか、どのような注意や励ましや戒めや導きなどを与えてくださっているかについて、考えることです。しかし、神の言葉がなかなか見出せないときには、次のように感情や記憶や理性や想像などを用いて、段階的に黙想することができます。

・感情の活用

扱っている個所を再び最初から最後までゆっくり読みますが、今回は、文書を一つずつ読んでから、短い間をとつて、自分の心の動きを調べます。自分の心の動きを調べるとは、浮かんだ感情、例えば、喜び、悲しみ、不安、恐れ、平安、退屈、無感情などを意識するということです。

・記憶の活用

何か心の動きを見出したら、そこで読書を止めて、浮かんだ感情を見つめます。この

感情は何（言葉、場面、人の反応）によって起こされましたか。どうしてでしょうか。どんな体験や出来事や出会いなどが思い起こされましたか。それと関連するもの（出会った人、行った場所、見た映画、読んだ本など）は、何でしょうか。

・理性と想像の活用

このみ言葉や自分の心の動き、また、思い出した体験や意識した他の記憶によって、神は今の（こんな現状にいる、こんな選択に直面している、こんな問題で悩んでいる）自分に何を伝えたいのでしょうか。何を示したいのでしょうか。どんな導き、使命、励まし、注意などを与えようとされているのでしょうか。

第3段階…祈り

たとえ祈る人がそれをはっきりとは意識していなくても、祈りはいつも、神の働きや神の呼びかけに対する人間の応答です。レクテイオ・デイヴィナは、このことを特にはっきりと示します。要するに、この段階は、前の段階であった黙想のときに見出した神の言葉に、応答することです。黙想によって、神から特別な恵みをいただいたということに気付いたなら、祈りは、感謝になります。黙想を通して、イエス・キリストのす

ばらしさの新たな側面が示されたなら、祈りは、賛美になります。このように、自分が聞き取った神の言葉によって、祈りは、お詫び、願い、約束、決心、また、実際の行動などにもなりえるのです。

第4段階…観想

観想とは、感情、記憶、理性と想像などのような能力を超えて、静けさの中で神の御前に憩うことです。読書、黙想と祈りの段階で、私たちは様々な能力を用いて、神の言葉を理解するよう、また、読み取った神の言葉に応えるよう努力します。けれども、現実には、自分の考えとか、望みや欲求を神の言葉として受け取り、神に従っているつもりが、いつの間にか自分自身の道を進んでいることになることも、決して珍しくありません。つまり、故意にはなくても、自分の働きによって、神の言葉や神の働きを妨げてしまうことがあるということです。確かに、それは一つの問題ですが、この問題をあまり大きく、例えば、黙想に意味がないと考えて、それを諦めるほど大きくする必要はありません。なぜなら、後で、自分の生き方とその結果を正直に振り返るならば、自分の間違いに気付くことができるからです。そして、自分の間違いを素直に認めた上で、それを繰り返すことがないように気を付けるならば、そのような過ちを犯すことが段々

と少なくなるからです。

けれども、真の観想において私たちは、自分の意識を神に向けながら神の前に静かに留まり、神の働きを承諾すること以外に何もしませんので、神の働きを妨げることもないのです。そのために、観想において神は、私たちの内で自由に働くことができますので、私たちは、神の望み通りに、段々とイエスの姿に変えられて行くのです。もちろん、観想の時に人間は、理性や感情などのような能力を用いないので、読書や黙想や祈りと違って観想は、私たちが記憶できるような体験にはならないのです。静けさの中で過ごす時間は、本当に観想であったかどうかということとは、自分の生き方の変化、特に他の人に対する態度の変化によってしか分かりません。要するに、私たちの生き方が、段々とイエス・キリストの生き方に近づいているならば、神の御前に過ごす時間は、本当に観想であったという確信を持つことができるのです。

観想は、人間がそれをしたいからできるようなことではありません。観想は、イエス・キリストによる神との関わりでの発展の結果であり、神の恵みなのです。すべての人々を愛してくださり、すべての人々の愛を求めておられる神は、確かにすべての人々にこの恵みを与えたいと望んでおられるのです。けれども、神が、この恵みをいつ与えてくださるかということとは分かりません。この恵みを受け入れるためにできることと言

えば、自分の心を準備するということだけなのです。神の言葉を黙想したり、理解したことを実行したりすることによって、イエス・キリストとの交わりの内に生きながら、「忙しい祈り」、つまり、様々な能力を用いて、いろいろな働きをした後に、静けさの中に留まり、意識を神に向けることは、心の優れた準備に外ならないのです。

レクティオ・デイヴィナは、読書以上、黙想以上のこと、すなわち、生きた神の言葉であるイエス・キリストとの交わりです。他の人との関係の場合と同じように、この交わりから喜びや平和などのような望ましい感情、また、新しい思想や気付きなどを得ることよりも、この交わり自体に忠実であることが何よりも大事なのです。したがって、レクティオ・デイヴィナが期待通りの実りをもたらさないと思っても、それを忠実に続けること、つまり、できるだけ毎日、最初から決めた（イエスに約束した）時間に行うことによって、この交わりが段々と深まってゆくのです。初めのうちは、考えることや、感じることも、また、話すことがほとんどですが、祈りが進歩すればするほど、すなわち、イエスとの交わりが深くなればなるほど、沈黙の時間が長くなるのです。一生懸命に聖書の言葉を考えたり、それを分析したりする以上に、沈黙の中で、神の働きを受けることによって、神の言葉は理解できます。また、自分の力を発揮することによって、沈黙の中で、神からいただいた力によって、聞き取った神の言葉を忠実に実行

することができません。

このように、私たちが、聖書を尊敬し、聖書を読み、研究し、黙想するのは、この本を知るためというよりも、この本を通してイエス・キリストを知るため、つまり、イエス・キリストと愛の絆によって結ばれ、イエスに従って生き、愛の交わりの完成である完全な一致に辿り着くためなのです。カトリック教会が教えている通り、「キリスト教信仰は『書物の宗教』ではありません。キリスト教は神の『ことば』の宗教であって、そのことばは、『記されているだけの無言のことばではなく、受肉して生きていくことばです』。聖書が死んだ文字となることのないように、生ける神の永遠のことばであるキリストが、『聖書を悟らせるために』聖霊によってわたしたちの『心の目を開いて』くださることが不可欠です」(カテキズム108)。

参考書

„Jak powstało Pismo Święte” Ks. Wojciech Pikor, 2010

“The Bible Compass” Dr. Edward Sri, 2009

“Gdy otwierasz Biblię” Ks. Rajmund Pietkiewicz, 1995

「教会における聖書の解釈」、教皇庁聖書委員会、1993

「カトリック教会のカテキズム」、1992（2002の翻訳）

「神の啓示に関する教義憲章」、第2バチカン公会議、1965
（2013の翻訳）

「福音書の歴史的真理性に関する指針」、教皇庁聖書委員会、1964

ΟΥΣ ΕΛΑΛΗΝ ΣΑΠΡΟΥΣ ΜΑ
 ΕΤΙΘΗΣΥΝ ΜΙΝ ΟΤΙ ΜΙ
 ΠΑΝΤΩΘΗΝΑΙ ΑΠΑΝΤΑ
 ΓΑΡ ΕΓΓΡΑΜΜΕΝΑ ΕΝ ΤΩ
 ΝΟΜΩ ΜΟΥ ΣΕΩΣΚΑΙΤΙ
 ΠΡΟΦΗΤΑΙΣ ΚΑΙ ΨΑΛΜΟΙ
 ΡΕΡΕΜΟΥ ΤΟ ΤΕΛΙΝ Η
 ΞΕΛΑΥΤΩΝ ΤΟΝ ΘΥΝ
 ΤΩ ΕΥΝΕΙΝΑΙ ΤΑΣΤΑ
 ΦΑΣ ΚΑΙ ΕΙΠΕΝ ΑΥΤΟΙΣ
 ΟΤΙ ΟΥΤΩΣ ΕΓΓΡΑΠΤΑΙ
 ΠΑΘΕΙΝ ΤΟΝ ΧΥΝ ΚΑΙ ΑΝ
 ΣΤΗΝΑΙ ΕΚ ΝΕΚΡΩΝ ΤΗ
 ΤΡΙΤΗ ΜΕΡΑ ΚΑΙ ΚΗΡΥ
 ΧΘΗΝΑΙ ΕΠΙ ΤΩ ΟΝΟΜΑ
 ΤΙ ΑΥΤΟΥ ΜΕΤΑΝΟΙΑΝ
 ΕΙΣ ΑΦΕΣΙΝ ΑΜΑΡΤΙΩΝ
 ΕΙΣ ΠΑΝΤΑ ΤΑ ΕΘΝΗ Α
 ΣΑΜΕΝΟΙ ΑΠΟ ΕΡΟΥΣ Α
 ΛΗΜ ΥΜΕΙΣ ΜΑΡΤΥΡΕΣ
 ΤΟΥ ΤΩΝ ΚΑΙ Η ΔΟΥ ΕΓΩ
 ΕΞ ΑΠΟΣΤΕΛΛΩ ΤΗΝ Ε
 ΠΑΓΓΕΛΙΑΝ ΤΟΥ ΠΑΤΡ
 ΟΥ ΕΦΥΜΑΣ ΥΜΕΙΣ Α
 ΚΑΘΙΣΤΕ ΕΝ ΤΗ ΠΟΛΕΙ
 ΕΩΣ ΟΥ ΕΝΔΥΣΗΣ ΘΕΣΥ
 ΤΟΥΣ ΔΥΝΑΜΙΝ ΕΞΗΓ
 ΓΕΝΑ ΕΛΥΤΟΥΣ ΕΩΣ ΠΡ
 ΖΗΘΑΝ ΙΑΝ ΚΑΙ ΕΠΑΡΑΣ
 ΤΑΣ ΧΕΙΡΑΣ ΑΥΤΟΥ ΕΥΑ
 ΓΗΣ ΕΝ ΑΥΤΟΥΣ ΚΑΙ ΕΓΕ
 ΝΕΤΟ ΕΝ ΤΩ ΕΥΑΛΟΓΕΙΝ
 ΑΥΤΩΝ ΑΥΤΟΥΣ ΟΙ ΕΣΤΗ
 ΔΕ ΑΥΤΩΝ ΚΑΙ ΙΑΝ ΕΦΕ
 ΡΕΤΟ ΕΙΣ ΤΟΝ ΟΥΡΑΝΟΝ
 ΑΥΤΟΙΣ ΠΡΟΣΚΥΝΗΣΑΝ
 ΤΕΣ ΑΥΤΟΝ ΥΠΕΣΤΕΡΑ
 ΟΙΣ ΕΡΟΥΣ ΑΛΗΜ ΝΕΤΕ
 ΧΑΡΑΣ ΚΑΙ ΗΣΑΝ ΙΑΝ ΠΑΝΤ
 ΕΝ ΤΩ ΕΡΩΣ ΕΥΑΛΟΓΟΥΝ
 ΤΩ ΤΟΝ ΘΝ ΑΜΗΝ



ΑΡΧΗ ΗΝ Ο ΛΟΓΟΣ ΕΚΕΙ
 Ο ΛΟΓΟΣ ΗΝ ΠΡΟΣ ΤΟΝ ΘΝ
 ΚΑΙ ΕΣΗΝ Ο ΛΟΓΟΣ ΟΥΤΟ
 ΗΝ ΕΝ ΑΡΧΗ ΕΡΟΣ ΤΟΝ ΘΝ
 ΠΑΝΤΑ ΔΕ ΑΥΤΟΥ ΕΓΕΜΕ
 ΤΟ ΚΑΙ ΧΩΡΙΣ ΑΥΤΟΥ ΕΓΕ
 ΝΕΤΟ ΟΥΔΕ ΕΝ ΟΓΕΓΟΝ
 ΕΝ ΑΥΤΩ ΖΩΗ Η ΚΑΙ Η
 ΖΩΗ ΗΝ ΤΟ ΦΩΣ ΚΑΙ ΤΟ
 ΦΩΣ ΕΝ ΤΗΣ ΚΟΙΤΗΣ ΑΙ
 ΝΕΙ ΚΑΙ ΗΣΚΟΤΕΒΑ ΑΥΤΩ
 ΟΥΚ ΑΤΕΛΑ ΕΓΩ ΕΓΕΝΕ
 ΤΟ ΑΝΘΡΩΠΟΣ ΑΠΕΣΤΑ
 ΜΕΝΟΣ ΠΑΡΑ ΘΥΘΝΟΜΑ
 ΑΥΤΩ ΙΩΑΝΝΗΣ ΟΥΤΟΣ
 ΗΛΘΕΝ ΕΙΣ ΜΑΡΤΥΡΙΑΝ
 ΗΝ ΜΑΡΤΥΡΗΣΗ ΠΕΡΙ ΤΩ
 ΦΩΤΟΣ ΙΝΑ ΠΑΝΤΕΣ Π
 ΣΤΕΥΣΩΣΙΝ ΔΙΑ ΤΟΥ
 ΟΥΚ ΗΝ ΕΚΕΙΝΟΣ ΤΟ Φ
 ΑΛΛ ΙΝΑ ΜΑΡΤΥΡΗΣΗ Π
 ΡΙ ΤΟΥ ΦΩΤΟΣ ΗΝ ΤΟ Φ
 ΤΟ ΑΛΛ Η ΕΙΝΟΝ Ο ΦΩΤΙ
 ΖΕΙ ΠΑΝΤΑ ΑΝΘΡΩΠΩΝ
 ΕΡΧΟΜΕΝΟΝ ΕΙΣ ΤΟΝ Κ
 ΣΜΟΝ ΕΝ ΤΩ ΚΟΣΜΩ ΗΝ
 ΚΑΙ Ο ΚΟΣΜΟΣ ΑΙ ΑΥΤΟΥ
 ΕΓΕΝΕΤΟ ΚΑΙ Ο ΚΟΣΜΟΣ
 ΑΥΤΟΥ ΟΥΚ ΕΓΝΩΕΙΣ
 ΤΑ ΙΔΙΑ ΗΛΘΕΝ ΚΑΙ ΙΩΑΝ
 ΟΙ ΑΥΤΟΝ ΟΥ ΠΑΡΕΛΑΒΟ
 ΘΕΟΙ ΔΕ ΕΛΑΛΑΝ ΑΥΤΩ
 ΕΛΘΗ ΚΕΝ ΑΥΤΕΙ ΟΣ ΤΟΥ
 ΣΙΑΝ ΤΕ ΚΝΑΒΟΥΤΕΝ ΕΣΑΙ
 ΤΟΙΣ ΠΙΣΤΕΥΟΥΣΙΝ ΕΙΣ
 ΤΟ ΘΝΟΜΑ ΑΥΤΟΥ ΟΙΟΥ
 ΚΕΣ ΙΜΑΤΩΝ ΟΥΔΕ ΟΥ
 ΒΕΛΗΜΑ ΤΟ ΟΣΑΡ ΚΟΣ
 ΔΕ ΑΛΕΚΟΥ ΕΓΕΝΗΘΗ ΟΣΑ
 ΤΟ ΚΑΙ Ο ΛΟΓΟΣ ΣΑΡΞ ΕΓΕΝ
 ΤΕ ΚΑΙ ΕΣΚΗΝΩΣΕΝ ΕΝ Η
 ΜΗΝ ΚΑΙ ΕΒΑΣΑΝ ΕΒΑ

ΚΑΤΑ ΔΟΥΚΕΝ

パチカン写本(4世紀の半ばに作られた旧約聖書・新約聖書のギリシア語写本)